

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月15日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：平成21年度～平成23年度

課題番号：21243043

研究課題名（和文）臨床教育学の構築と教師の専門性の再検討

研究課題名（英文）Construction of the “clinical research on human development and education” and reconsideration of the teacher’s professional character

研究代表者

田中 孝彦（TANAKA TAKAHIKO）

武庫川女子大学・教育研究所・教授

研究者番号：80092261

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、国際的な比較研究と国内の歴史的展開の研究とを通して、臨床教育学の研究・教育に関わる基本的な概念と方法を明らかにし、教師の専門性を再検討することであった。大学調査、地域調査、海外調査を通して、臨床教育学の構築の試みは、社会・地域の中で様々な困難を抱えて生きる子どもとその援助者たちの理解と、それに基づく発達・学習援助の実践を構想する教師の専門性の開発に貢献する一つの重要な契機であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this joint-research is to elucidate some fundamental concepts and methodologies of the “clinical research on human development and education” (CROHD) and to reconsider the teacher’s professional character by international comparative studies and domestic historical studies. Through the University-research, Community-research, and International-research, it is clarified that the concept of ‘CROHD’ should be one of the most important moments to improve the teacher’s professional competencies which include the ability to understand and support children who have some difficulties in the context of their cultural and historical lives in transitional communities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
21年度	10,200,000	3,060,000	13,260,000
22年度	7,400,000	2,220,000	9,620,000
23年度	7,400,000	2,220,000	9,620,000
年度			
年度			
総計	25,000,000	7,500,000	32,500,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：臨床教育学，子ども理解，教師教育，発達援助専門職，援助職養成

## 1. 研究開始当初の背景

過去20年の間、日本の教育学の世界では、臨床教育学の開拓の模索が続けられてきた。

私たちが、福祉・医療・心理臨床などとの接点を持った総合的な「子ども理解」と「人間発達援助」の学（広義の臨床教育学）への志向と、「教師の専門性の再検討」「教師の養

成・教育の改革」の学（狭義の臨床教育学）への志向との間を往還しながら、臨床教育学の構築を試みてきた。本研究は、こうした動向と蓄積を踏まえ、相互に関連する次の三つの目的を果たそうとするものであった。

1) いくつかの大学と地域で実際に行われている模索と、私たちが重ねてきた試みに即して、日本の臨床教育学の研究・教育の今日的な状況と問題・課題の確認・整理を行う。

2) とくに、この間の私たちの臨床教育学の開拓の動きに直接ふれながら学習・研究にとりくんできた現職教師、教師を目指す学生・大学院生たちによる教師の専門性の問い直しの過程に光を当て、その到達点を確認する。そして、そこから、教師の養成・教育・研修の内容の改革の課題を抽出する。

3) 共通する問題意識の下に進められている世界の臨床教育学と教師教育改革の動きとの交流を深め、それを通じて日本の臨床教育学と教師教育改革の研究の基本的な構想・概念・方法の明確化を図る。

本研究の計画に至るまでに、私たちは、i) 日本教育学会課題研究「臨床教育学の動向と課題」（98年9月～01年8月）、ii) 同特別課題研究「教師教育の再編と教育学の課題」（02年9月～05年8月）、iii) 科研費基盤研究（B）「臨床教育学の展開と教師教育の改革」（03年4月～06年3月）等の共同研究に取り組んできた。

それらの詳細は、i) については小林剛・皇紀夫・田中孝彦編著『臨床教育学序説』（2002年4月、柏書房）を、ii) については日本教育学会特別課題研究・研究集録『教師教育の再編と教育学の課題〈1〉〈2〉』（03年8月、06年8月）を、iii) は科研費研究成果報告書『臨床教育学の展開と教師教育の改革に関する研究』（06年3月）及び、田中孝彦・森博俊・庄井良信編著『創造現場の臨床教育学』（08年12月、明石書店）にまとめられている。

そのなかで、私たちが行ってきたのは次のような調査・研究であった。

#### 1) 国内調査

i) 京都大学大学院臨床教育学講座、ii) 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科、iii) 北海道大学教育学部教育臨床専攻、iv) 北海道教育大学大学院学校臨床心理専攻、v) 都留文科大学大学院臨床教育実践学専攻・初等教育学科臨床教育学コース等において実際に行われている臨床教育学の試みを継続的に調査してきた。

それらを通じて、日本の臨床教育学の動きが、科目・講座・専攻の新設などの制度的レベルに留まらず具体的な内容を生み出しつつあること、現代社会における子ども理解と子どもの生存・成長を支える援助的・教育的実践の構想に関わる教育学の自己革新の試

みとして展開されてきていること、大学院を含んだ教師の養成・教育の改革とそのカリキュラム作りと密接な関連を持って進められていることなどを確かめてきた。

#### 2) 海外調査

同時に、次のような海外調査を重ねてきた。

①フィンランドのヘルシンキ大学のY・エンゲストロームらによる人間発達援助学の構築と学習・教育概念のとらえ直し、オウル大学教師教育学科のP・ハッカライネンらのNarrative Learningの研究と教師教育改革の試みなどを対象とした調査。②カナダのトロント大学教育学部付属学校の「子ども理解」を軸とした教師教育改革の試みなどを対象とした調査。③アメリカのコロラド大学ボルダー校のD・リントンらによる子どもの感情生活の重要性をとらえ直そうとする教育哲学の試み、同校の現職教員再教育の試みなどを対象とした調査。

これらによって、私たちの問題関心と共通する教育学・教師教育の改革の動きが海外でも生まれていることを確かめることができ、それを担う実践家・研究者たちと交流することができた。

#### 3) 理論的研究

私たちはこれらの調査と研究交流を進めながら、臨床教育学の課題と構想・概念・方法に関する理論的検討を重ねてきた。

そのなかで、「子ども理解のカンファレンス」、「子どもを支える地域の新しい共同関係」、「人間発達援助専門職」、「人間発達援助専門職の一員としての教師」、「子ども・親・発達援助専門職の生活史・実践史の聴きとり」、「ケアと教育の結合」、「子ども理解と学習指導の改革の結合」、「子どもの自己感覚・自己意識の発達を支える援助・教育の全体構想」など、臨床教育学と教師教育の研究を具体化するための言葉を徐々に共有するようになり、それらの問題・課題に関する理論的な共同研究を始めることができた。

#### 2. 研究の目的

こうした蓄積を踏まえ、今回の共同研究では、以下の具体的目標を達成したい。

1) 次の三つの種類の調査を行い、臨床教育学の構想・課題、概念・方法の理論的検討を深める。①日本の大学で進められている臨床教育学の構築の動き、教師の専門性の再検討と教師の養成・教育・研修の改革の試みの今日的な到達と課題を整理する。②大学だけでなく、地域において、問題・困難を抱えた子どもについての理解の深化、子どもを支える新しい共同関係の創造を追求し、発達援助専門職や教師のあり方を模索している人々の動きについて調査研究を本格化し、臨床教

育学への社会的要求を確かめる。③共通する問題意識の下に教育学と教師教育の改革に取り組んでいる世界の実践家・研究者たち（フィンランド・カナダ等）との研究交流を広げ深め、その到達を撰取する。

2) とくに、教師の専門性の再検討と教師の養成・教育・研修の内容の改革の今日的課題の抽出を、次のように進める。

①臨床教育学の開拓の試みに触れて学習・研究してきた現職教師、学生・院生たちの間に起きている教師の専門性の問い直しの動きを、聴きとり記録し吟味する。

②それを通じて、教師を、現代の「発達援助専門職」の一員、子どもの生活史・生育史上の問題・課題の共感的な理解者、子どもが生存・成長のために必要とする人間関係のコーディネイターとして位置づけ直す。

③教師の養成・教育・研修の改革課題としては、困難を抱えた子どもを支えている教師の生活史・実践史に関する事例的な学習（「教師のライフヒストリーの聴きとり」）、福祉・医療・心理臨床などの諸分野の「発達援助専門職」の経験・洞察の学習など、「子ども理解」に関わる事例的学習と理論的学習（研究）の結合を重視する必要性を提起する。

④教師の養成・教育・研修においては、その担い手である **Teacher Educator**（教師教育の教師）のあり方について検討する。

### 3. 研究の方法

私たちが、これまでの共同研究を通じてゆるやかに共有するようになり、本研究において本格的に採用し展開しようと考えている研究方法は、次のようなものである。

1) 教育の当事者は子どもであり、子どもと共に生きている親・おとなであり、彼らを支えている「発達援助専門職」（教師を含む）たちである。これらの人々の声を聴き、その生活史・生育史・実践史の語りを記録し、それを吟味することを研究の基本とする（Narrative-Based Approach）。

2) 子どもたちが困難に直面するのも、支えてくれる他者に出会うのも、彼らが暮らす具体的な地域においてである。相談室で子どもに接するだけでなく、地域で子どもたちにできるだけ自然に接近することを重視する（Community-Based Approach）。

3) 子どもの生存・成長の質は、結局は、その子が世界の中で形成してきた自己感覚（Sense of Self）の質によって左右される。子どもの自己感覚の発達に関心を向け、個々の関係・能力の獲得を常にそれとの関係において研究することを重視する（Self-Focused Developmental Approach）。

今、世界の間人発達とその援助に関する研究は、「量的研究」とどまらず「質的研究」

を深めていくことを課題とするようになっていく。上述の私たちの方法意識は、世界の間人発達とその援助に関する「質的研究」の試みにおいて、共通に重視されてきているものでもある。あくまでも日本の子どもの現実から出発し、臨床教育学の構築を図り、教師の専門性を問い直し、教師教育の改革課題を探り、そのために必要で国際的にも流通可能な概念・方法を練り上げようとする本研究は、日本の教育学の新しい展開と、世界の間人発達とその援助に関する「質的研究」の発展を担う、一つの仕事になりうるのではないかと考えている。

### 4. 研究成果

以上に述べた本研究の目的を達成するために、具体的には以下に記す実地調査研究と理論研究を行い、共有すべき資料や研究成果を各年度（平成22年～24年）に『臨床教育学の構築と教師の専門性の再検討』（Ⅰ～Ⅲ）にまとめることができた。

また、それらの成果を国内教育関連諸学会（日本教育学会・日本臨床教育学会・日本生活指導学会・北海道臨床教育学会等）及び国際学会（ISCAR: International Society for Cultural and Activity Research[文化と教育活動に関する国際学会]等）で発表した。

今後は、これらの研究成果を集約した書籍等の出版物を公刊する予定である。

1) 大学調査では、臨床教育学の開拓を志向しつつ教師の専門性の再検討を進めている国内諸大学における実地調査を、都留文科大学、北海道教育大学、武庫川女子大学で行なうことができた。3大学では、臨床教育学の開拓の試みに触れて学習・研究してきた現職教師、学生・院生たちの履修体験等を聴きとり、そのTranscription（テキストデータ）に基づく共同吟味を行ない、そこから臨床教育学構築への課題意識と、これからの教師・発達援助職に求められる高度な専門性を構成する諸要因を分析することができた。

この研究過程の成果は、日本教育学会を含む内外の学会で発表された。これらの過程で収集された一次データ分析をさらに比較検討し、詳細に理論化・概念化し、出版物等で公刊していきたい。

2) 地域調査では、地域における発達援助専門家たちとの連携・共同を基盤に教師の専門性を問い直している幾つかのコミュニティにおける実地調査を、北海道檜山郡上ノ国町、岐阜県恵那地域、東日本大震災の被災地域を中心に行なうことができた。

その成果は、研究分担者の共同研究会等で吟味され、研究成果報告集『臨床教育学の構

築と教師の専門性の再検討』(Ⅰ～Ⅲ)等で報告し、調査研究に協力していただいた地域の当事者たち(教師や地域発達援助職の人びと)に還元した。

また被災地域の教師及び発達援助職の聴きとり調査等に基づく臨床教育学的な研究成果は、日本臨床教育学会震災調査準備チームとも連携しながら『3・11 あの日のこと、あの日からのこと—震災体験から宮城の子ども・学校を語る』等の出版物としても公刊することができた。

3) 海外調査では、臨床教育学と重なる問題意識の下に教育学と教師教育の改革に取り組んでいる海外の拠点大学における実地調査を、フィンランドのオウル大学カヤニ校、カナダのサイモンフレーザー大学、アルバータ大学、ドイツのノルトライン・ヴェストファーレン州ビーレフェルト地域(治療共同体)、ユトレヒト大学、スコットランドのエジンバラ大学において行うことができた。

その成果は、各年度の『臨床教育学の構築と教師の専門性の再検討』(Ⅰ～Ⅲ)等で報告した。また、これらの蓄積に基づいて、日本臨床教育学会の設立と展開に関わる国際的な共同研究の確かな基盤が構築されつつある。その成果は、ナラティブ・インクワイアリーや、ナラティブ・ラーニングに関する翻訳出版や、国際的な共同出版物として一部公刊された。また、今後も公刊予定である。

4) 理論研究では、臨床教育学の概念と研究方法について、東京大学名誉教授の堀尾輝久氏より「発達教育学と臨床教育学」というテーマで、広島大学名誉教授・武庫川女子大学名誉教授の新堀通也氏より「臨床教育学の成立と展開」というテーマで、東京都立大学名誉教授の坂元忠芳氏より「治療教育学と臨床教育学」というテーマで、発題をいただき、それにもとづく共同検討を行なうことができた。また、教師の専門性の再検討に関しては、東京大学の勝野正章氏より臨床教育学と教師教育というテーマで問題提起をいただき、それも共同吟味することができた。

こうした専門的知見の聴きとり(共同インタビュー)に基づく本科研共同研究会でのディスカッションをとおして、以下の理論研究上の課題がいつそう明らかになった。

①戦後日本教育学史における臨床教育学の位置と役割を明確にすること、②生活綴方教育の遺産と臨床教育学との関連を明確にすること、③生活指導研究の蓄積と臨床教育学との関係性を明らかにすること、④知育・学習理論の展開にとっての臨床教育学の役割を明確にすること、⑤発達教育学と臨床教育学、特別支援教育と臨床教育学との関係性をさらに明らかにすること、その際、ヴィゴ

ツキー(L. S. Vygotsky)やワロン(H. Wallon)の発達理論が臨床教育学の構築に果たす役割を再検討すること。

教育実践研究と臨床教育学という観点では、臨床教育学における実践と理論の統合、教師の教育実践記録の臨床教育学的な叙述と分析の方法、子ども理解のカンファレンスに基づく教育実践の構想力涵養の方法、臨床教育学における自然観察法と参与観察法、臨床教育学的な実践参画研究の在り方が問われなければならない。

臨床教育学と隣接諸科学との関連では、精神医療と臨床教育学，“narrative-based”の医療人類学と臨床教育学、福祉臨床と臨床教育学、学校ソーシャルワーク(SSW)と臨床教育学、学校カウンセリングと臨床教育学、心理治療・心理相談と臨床教育学、臨床哲学・臨床人間学と臨床教育学、等が問い直されなければならないこともいっそう明らかになった。

教員養成・教師教育改革の動向を検討するための臨床教育学の役割については、学校教師のライフ・ヒストリーやライフ・イベントのナラティブな聴きとり調査に基づく教師教育改革構想の提言、教師の養成・教育におけるフィールド参加型学習とその事前・事後演習や事例研究法(case conference method)の開発、フィンランドやカナダなどの教師教育改革と日本のそれとの国際比較研究等がさらに深められなければならない。

こうした理論的研究の成果についても、各年度の『臨床教育学の構築と教師の専門性の再検討』(Ⅰ～Ⅲ)等で報告した。また、国際的な共同研究や、新しく設立された日本臨床教育学会における学術研究の重要な問いの指標として活用される予定である。以上のことをとおして、このたびの共同研究発足当初に掲げていた目標、すなわち、①日本の臨床教育学の構築、②教師養成・教育における改革課題の抽出、③臨床教育学の国際的な共同研究の基盤づくりが、ほぼ予定通りに達成され、また予想を超える成果も生まれた。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計14件)

- ① 田中孝彦, 臨床教育学の思想と方法—ある地域研究の歩みをふりかえって, 臨床教育学研究, 日本臨床教育学会誌, 査読無, 創刊特別号, 2011, 16-31.
- ② 田中孝彦, 東日本大震災と臨床教育学の研究課題—宮城の教師たちの震災体験の語りを聴いてきて, 教師の専門性と臨床教育学, 臨床教育学研究資料集, 第3号, 査読無, 2011年, 18-23.
- ③ 森博俊, 特別支援教育と障害をもつ子どもの理解—発達障害・軽度知的障害の場合を

中心にして、臨床教育学研究、日本臨床教育学会誌、査読無、創刊特別号、2011、114-126.

④ 筒井潤子、臨床教育学は東日本大震災とどう向き合うのか—4ヶ月目の今時点で、臨床教育学研究、日本臨床教育学会誌、査読無、創刊特別号、2011、3-13.

⑤ 小林剛、日本の臨床教育学はいかに形成されたか、臨床教育学研究、日本臨床教育学会誌、査読無、創刊特別号、2011、6-15.

⑥ 田中昌弥、教育学研究の方法論としてのナラティブ的探究の可能性、教育学研究、日本教育学会誌、78巻4号、査読有、2011、77-87.

⑦ 田中昌弥、臨床教育学の課題とナラティブ的探究—教師の専門性と子どもの世界を読み解く、臨床教育学研究、日本臨床教育学会誌、査読無、創刊特別号、2011、44-57.

⑧ 庄井良信、ナラティブ・ラーニングの概念と研究デザイン—生成的実験法(genetic experiment)の臨床的拡張を求めて、臨床教育学研究、日本臨床教育学会誌、査読無、創刊特別号、2011、58-69.

⑨ 田中孝彦、教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想、教師の専門性と臨床教育学、臨床教育学研究資料集、第2号、査読無、2010年、182-186.

⑩ 影浦紀子、都留文科大学調査報告、臨床教育学研究資料集Ⅱ、査読無、第2号、2010年、54-59.

⑪ 田中孝彦、子ども理解のカリキュラムと教師教育の改革、都留の臨床教育学、都留臨床教育学会誌、査読無、第3号、2010年、2-23.

⑫ 富田充保、子ども・若者の実態とニーズに応じた多様な柔軟な学校システムと運営—フィンランドにおける袋小路にならない柔軟なユースワークと教育、SGU 教師教育研究、札幌学院大学研究紀要、査読無、第24号、2010年、1-8.

⑬ 田中昌弥、物語論的学校研究の意義と可能性—D. Jean Clandininの研究グループの活動を手掛かりに、生活指導研究、日本生活指導学会誌、査読有、第26号、2009年、8-21.

⑭ 筒井潤子、教師教育における実習体験の深化のために：臨床教育学フィールドワークのケースカンファレンスの試み、都留文科大学研究紀要、査読無、第70号、2009年、1-14.

〔学会発表〕(計12件)

① 庄井良信、北海道における臨床教育学—その歩みと未来展望、北海道臨床教育学会設立大会(招待講演)、2011年1月29日、札幌サンプラザホール.

② 富田充保、フィンランドにおける子ども・若者の実態とニーズに応じた柔軟な学校システムと運営—中等学校特別クラスでのマイオウンキャリア(My own career)プロ

ジェクトを素材に、北海道臨床教育学会 第1回大会、2011年7月18日、北海道教育大学.

③ 筒井潤子・渡邊由之・影浦紀子、子ども理解のカリキュラムと教師教育改革(その2)—都留文科大学の実践の事例に即して、日本教育学会 第70回大会、2011年8月25日、千葉大学.

④ 田中昌弥、教師教育改革におけるナラティブ・アプローチの可能性—アルバータ大学・教員養成・現職教員教育研究センターにおけるNarrative inquiryを手掛かりとして、日本教育学会(招待講演)、第70回大会、2011年8月25日、千葉大学.

⑤ 庄井良信、他者に臨む「私」への根源的リフレクション—臨床教育学の立場から、日本生活指導学会 第29回大会(招待講演)、2011年8月26日、金沢大学.

⑥ 庄井良信、Narrative learning intervention in an inner-city public school, ISCAR Congress in Rome 2011(招待講演)、International Society for Cultural and Activity Research、2011年9月5日、Cavour Center, Rome, Italy.

⑦ 筒井潤子、臨床教育学は東日本大震災とどう向き合うのか、日本臨床教育学会 第1回大会(招待講演)、2011年10月2日、北海道教育大学.

⑧ 田中孝彦、教師教育における子ども理解のカリキュラムとカンファレンス的学習の位置について、日本教育学会第69回大会(招待講演)、2010年8月21日、広島大学.

⑨ 筒井潤子、教師養成改革の試み—学生カンファレンスから、日本教育学会 第69回大会、2010年8月21日、広島大学.

⑩ 龍崎忠、臨床教育学の動向とデュイー「ナラティブ的探究」が示唆するもの、日本デュイー学会第54回大会、2010年9月20日、大正大学.

⑪ 氏家靖浩、特別支援教育のビデオエスノグラフィー—小学校のクラスのなかの発達障害児を巡って、日本質的心理学会第7回大会、2010年11月14日、茨城大学.

⑫ 田中孝彦、今日の現職教師の学習・研究要求と子ども理解のカリキュラムについて、日本教育学会第68回大会(招待講演)、2009年8月28日、東京大学.

〔図書〕(計8件)

① 田中孝彦、子ども理解と自己理解、かものがわ出版、2012年、総ページ数238.

② 田中昌弥、子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティー—カナダの小学生が語るナラティブの世界、明石書店、2011年、総ページ数315.

③ 佐藤隆・山崎隆夫・(佐藤隆編), 教師のしごと, 旬報社, 2012年, 総ページ数 185 (本人担当 pp.3-6, pp.166-182).

④ 杉山敏夫・永田三枝子・大高一夫・森博俊, こころをみつめてー知的障害学級から特別支援教育の質を問う, 群青社, 2011年, 総ページ数 237.

⑤ 岡本哲雄・山内清郎・西村拓生・皇紀夫, 「人間と教育」を語り直すー教育研究へのいざない, ミネルヴァ書房, 2012年, 総ページ数 240, 本人担当 pp.42-68.

⑥ 佐藤学・小森陽一・田中孝彦, 子ども理解と憲法の再発見ーいのち, 学び, そして9条, 高文研, 2010, 総ページ数 94, 本人担当 pp.78-93.

⑦ 田中孝彦, 子ども理解: 臨床教育学の試み, 岩波書店, 2009, 総ページ数 220.

⑧ 福井雅英, 子ども理解のカンファレンスー育ちを支える現場の臨床教育学, かもがわ出版, 2009, 総ページ数 223.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田中 孝彦 (TANAKA TAKAHIKO)

武庫川女子大学・教育研究所・教授

研究者番号: 80092261

### (2) 研究分担者

森 博俊 (MORI HIROTOSHI)

都留文科大学・初等教育学科・教授

研究者番号: 10145708

田中 昌弥 (TANAKA YOSHIYA)

都留文科大学・初等教育学科・教授

研究者番号: 60261377

佐藤 隆 (SATOU TAKASHI)

都留文科大学・初等教育学科・教授

研究者番号: 70225960

筒井 潤子 (TSUTSUI JYUNKO)

都留文科大学・初等教育学科・准教授

研究者番号: 70405075

庄井 良信 (SHOU YOSHINOBU)

北海道教育大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号: 00206260

福井 雅英 (FUKUI MASAHIDE)

北海道教育大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号: 20388804

富田 充保 (TOMITA MITSUYASU)

札幌学院大学・人間科学部・教授

研究者番号: 20305882

小林 剛 (KOBAYASHI TSUYOSHI)

武庫川女子大学・臨床教育学研究所・研究員

研究者番号: 60020137

龍崎 忠 (RYUZAKI TADASHI)

岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授

研究者番号: 80340389

氏家 靖浩 (UJIIE YASUHIRO)

仙台白百合女子大学・人間学部・准教授

研究者番号: 10311557

山内 清郎 (YAMAUCHI SEIRO)

大谷大学・文学部・准教授

研究者番号: 80351253

影浦 紀子 (KAGEURA NORIKO)

園田学園女子大学・人間教育学部・講師

研究者番号: 00390287

### (3) 連携研究者

渡邊由之 (WATANABE YOSHIYUKI)

武庫川女子大学・教育研究所・助手

研究者番号: 40611348